

### 1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	1990100180		
法人名	医療法人社団小羊会		
事業所名	グループホーム飯田		
所在地	山梨県甲府市飯田3丁目5番3号		
自己評価作成日	平成22年1月15日	評価結果市町村受理日	

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

利用者一人ひとりの状態や嗜好を考慮した援助が心がけている。また、四季折々の外出を通じて、季節の移り変わりや日常生活の変化を感じていただける生活の支援を行う。

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	<a href="http://www.kaigo-kouhyo-yamanashi.jp/kaigosip/Top.do">http://www.kaigo-kouhyo-yamanashi.jp/kaigosip/Top.do</a>
----------	---

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

甲府市街地の幹線道路からやや奥まった所に新設され、近隣を一戸建てや集合住宅に囲まれている。地区の自治会に加入し、運営推進会議も軌道にのり2か月に1回開催され、貴重な第三者の意見を聞く機会となっている。また、馴染みの理・美容院への送迎介助や利用者の友人、教え子、職場の部下の面会など、入居前の暮らしの継続を柔軟に支援している。また、思いや意向を把握するために「すぐやるカンファレンスシート」を利用者ごとに作成し、課題や疑問点、気になる事など、方向性について検討し、介護の方針が立てられケアの実践に活かされている。各居室の中に、夫婦対応の部屋が2部屋用意されている。居室ごとにカーテンや持ち物は、全て本人の馴染みの家具を配置することになっており、昔の習慣にも配慮するなど、個人の生活にあった居室作りとなっている。

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	山梨県社会福祉協議会		
所在地	甲府市北新1-2-12		
訪問調査日	2月26日		

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働いている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない			

自己評価および外部評価結果(グループホーム飯田)

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I. 理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	「入居者一人ひとりが地域の一住民として社会参加できるように援助します」をはじめに、4つの理念を掲示板に掲載し共有している。	1年前に開設され、職員の入居者一人ひとりへの援助の心得が4項目に分けられ、理念として謳われている。ただ、管理者が理念の全てを、機会あるごとに説明するには言葉が長く、職員に簡潔に伝わりづらいつころがある。	管理者と職員は、今の理念を念頭に置き、全体会議やカンファレンスなど実践で共有できる言葉にポイントを絞り、毎日の利用者の関わりの中で理念が活かされるよう期待したい。
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	自治会に加入し、組長会議に参加している。お祭りや消防訓練、地域の行事に参加し、子供達の担ぐ御神輿と利用者がふれあう機会を設けている。	市街地の幹線道路からやや奥まった所に立地し、周囲は集合住宅も多いが、地区の自治会に加入している。民生委員による大正琴、愛育会を通じて保健師の訪問を受け、地域の老人も参加した健康の話の場にもつながった。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	地域包括支援センターきょうりつが、主催する認知症サポーター養成講座の会場として使って頂き、認知症普及啓発に協力している。また、穴切ふれあいクラブによる、地域の老人会の皆様を招いて、体操・工作等の交流会を実施している。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	2か月に一度の開催をしている。日々の活動状況や様子、行事の報告、意見交換をしている。	地域包括支援センター・自治会長・市の介護保険課職員・民生委員・家族・利用者で構成され、事業所の現状の報告と共に、各委員より事業所の利用状況や料金体制など、率直な外部の意見を聞く機会となっている。運営推進会議にて、食事の試食が行われ、また、愛育会からも試食の要望があり、実施に向け検討している。	メンバーからは第三者として率直な意見を頂いている。議題によっては、消防署、医療関係者などに依頼したり、複数の家族や法人の代表の参加も求め、会議をサービス向上に活かしていただきたい。
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	運営推進会議のメンバーとして参加されている。情報提供等、密接な連絡をしている。	事業所が抱える問題として、医療行為が必要な利用者や重度の場合の相談など、事あるごとに市の担当者と連携を図っている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	職員個々は理解していると思われるが、何が良くて何が悪いのか理解は重要。身体拘束に関する勉強会までにはいたっていない。今後の開催、委員会の設置は必要である。	両ユニットのホールから離れている玄関、居室の履き出し様の窓が、安全を図るため施錠されている。また、職員が日常の介護をする上で、たまにスピーチロックが見受けられ、身体拘束をしない介護の実践が課題となっている。	マニュアルを備えるだけでなく、なぜ鍵をかけるのが身体拘束なのか、またスピーチロックをしない介護の方法など、外部・内部問わず研修を行い、介護の質を高める取り組みを望まれる。
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	身体拘束と同じく、勉強会実施の必要がある。モラルや法令遵守の教育を浸透させ、防止しなければならない。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	成年後見制度を利用する方が1名おります。理解している職員もいるが、対応できるように制度の概要は学ぶ必要がある。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	運営規定、重要事項等をわかりやすく説明し、不明な点がないように、不安にならないように理解して頂き同意を得ています。要望や疑問についても、必ず聞くように対応している。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	運営推進会議に参加して頂き、意見を外部に反映している。今後は、参加者にバラつきがないように計画しなければならない。家族会の設置も検討している。	近隣の家族は頻回に面会に訪れ、意見や要望など伝え、職員は共有できる連絡帳に記録している。しかし、県外の家族など、事業所からの情報提供もまだ少なく、意見や要望を受け入れ運営に反映するところまでは至っていない。	職員の異動、日常の健康状態や生活の様子等、金銭収支の報告や介護計画書の署名の折、またホーム便りを発行するなど、家族との連携を深め、何でも言い表せる関係の構築が望まれる。
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	全体会議やカンファレンス等で、職員の要望を聞く機会を設けている。職員同士の連携や和が崩れないように努めている。	職員は意見や情報を確認ノートに記録し、管理者は申し送りや全体会議等で答えている。開設間もない事もあり、職員と法人とのスムーズな関係はこれからとなっている。また、建物の構造上、夜勤の2人体制が望まれている。	法人の関係者は週に1回訪れ、管理者と日常業務や経営上の話がもたれる。職員と法人の話し合いを多く持ち、運営に反映される事が望まれる。
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	職員の意識が向上するように、個々の実績や実力を掌握している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	法人本部の研修が年2回あり、研修の題材を翌月の勉強会に活かしている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	甲府市主催のグループホーム交流会に参加している。		
<b>Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	本人が安心してサービスを利用するために、家族や職員と相談し、その他の利用者との関係を配慮し、環境に馴染めるように支援している。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	契約の際に不明な点、不安な点を聞くようにしている。サービス導入まで、こちらから連絡するように努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	入居に至るまで、その人に合ったサービスの利用を勧めております。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	職員主導の支援ではなく、入居者の意見要望を出来る限り聞き支援している。入居者から学べるような、支え合いながらの生活を目指す。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	家族と本人の関係性が途切れないように、家族と触れ合う時間を出来るだけとってもらう事を、お願いしている。		



自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	連絡ノートを活用し、確実に申し送り出来るようにしております。ケアに関する職員個々の意見・疑問を言えるように、カンファレンスシートを会議で使用し、介護計画作成に活かしております。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	併設している小規模多機能の利用者との交流や、地域の穴切ふれあいクラブの行事にも参加し、柔軟に対応しております。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	自治会・愛育会・老人会・地域包括支援センターと交流し、施設の在り方の理解に努めております。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	かかりつけ医は、家族対応となっておりますが、受診対応が困難な場合、往診されている利用者もおります。受診の際は、その都度、血圧や様子等の情報提供をしています。	全ての利用者は、かかりつけ医があり、家族が通院介助を行うことが原則となっている。家族が県外の場合、事業所に医師の往診となる。また、事業所とかかりつけ医との連携がないため、日常の健康に異変があるとき対応が不安となっている。	家族対応ではあるが、事業所とかかりつけ医の関係を築くこと、また協力医との連携も鮮明にし、医療に関して職員の負担にならない対応策が望まれる。
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	常勤の看護職がいないため、適切な受診等の判断が難しい時もある。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	サマリーを作成し情報提供を行っております。退院にむけて、担当医師や看護師、家族と密接に連絡を取り、連携するように努めている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	現在看取りは行っておりません。重度化した場合は、医師・家族・管理者がこれからの方向性を話し合い、医療機関との連携、支援を考えております。日頃から重度化や終末期の想定を、家族と話せるような関係性は必要と考えている。	事業所の方針は、医療支援が出来ないこともあり、看取りが出来ないことを入居時に、説明をしている。また、入居と同時に、介護老人福祉施設の申し込みも勧めて、利用者の今後の対応策の一つとしている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	緊急時対応マニュアルは作成し、全体会議で再確認しております。今後、消防署の応急救護訓練参加を計画している。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	自治会主催の消防放水訓練に参加している。地震時の集合訓練実施、また河川に近いため、今後は水害に対する避難訓練も必要となる。	職員間で消火班・通報班・避難班に分け、初期消火や避難誘導の訓練を行った。しかし、利用者の参加や地域住民に協力を依頼するなど、あらゆる事を想定した防災訓練は実施されていない。備蓄もこれからとなっている。	様々な災害に備え、昼夜を通して時間を想定し、また職員だけの誘導に限界があることから、やはり地域住民の参加をお願いした防災訓練が必要と思われる。今後の実施の取り組みに期待したい。
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	入浴や脱衣時、トイレ誘導、失禁時の対応等の羞恥心の配慮やプライバシーの確保には、職員に対し指導はしている。	年長者として敬意を払い、名前の呼び方は統一されている。部屋へ入るときのノックや、入浴のプライバシーは守られている。しかし、介護をしているとつい大きい声になったり、忙しい時トイレのドアが開けたままになっている時もある。	新人の職員も多いため、排泄、また日常の介護の上で語調、人前で恥をかかせない言葉かけ、誘導時の対応に配慮するなど、プライバシーの研修が望まれる。
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	言いたい事、したい事が言える利用者との関係性の構築を心がけている。それでもなかなか意見を言えない方には、家族からの情報、代弁できる対応も必要である。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	本人の体調や気分を見極め、ペースに合わせ支援している。役割をもって頂いている方もおり、こちらからではなく、利用者から「手伝いましょうか?」と言って頂けるような関係を作っている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	本人の趣味趣向をアセスメントし、その人らしさが失われないようにしている。衣類も意見を聞くために、一緒に買いに行く時もあります		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員が一緒に準備や食事、片付けをしている	菜園にて野菜を皆で育てている。収穫し食べる事を楽しみにしている方もおります。洗米や野菜の裁断、配膳、洗い物の一連の流れを手伝って頂いている。その人に合った食事形態で対応しております。	献立のメニューが調理され法人から送られてくる。それを職員が指示通りの処理を行いお皿に盛り付け、ご飯と汁物は台所で作っている。職員は検食担当が一人、他は食事介助にあたっている。一番の楽しみである食事風景から、五感を刺激する音や匂い、喜びや楽しみの表情が見られなかった。	行事食(誕生日、敬老会)作りを企画し、鍋パーティやケーキ作りなど、利用者と職員が準備や調理を一緒に楽しんでいる。この様な実例や、来月愛育会から依頼された試食会後の外部の意見を取り入れ、運営に反映されることに期待したい。
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	水分チェック表にて確認しております。熱発、便秘の時などに活用しています。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後口腔ケアを実施している。声をかけ誘導し、出来る限り本人にして頂く。不足箇所は職員が介助する。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄チェック表を使用し、排泄パターンを掌握してトイレ誘導しております。	排泄は自立の利用者が多く、便は職員が視認しパターンを把握している。入居時に昼間のリハビリパンツ使用から綿パンツにパットだけで過ごせるようになった。トイレのドアに「便所」の表示を強調し、排泄の自立支援に向けた介護に力を注いでいる。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	散歩や体操、水分摂取を心がけております。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	基本的には食後以外は自由であるが、ほとんどの利用希望は午後である。気分を変え2階の炭酸泉の浴場も使用する時もある。	毎日入浴が希望の時間に出来ることを、重要事項に掲げている。現在は2日に1回の方が約半分、残りの人は3日に1回の間隔で入浴をしている。入浴を拒む人に対しては、時間を置いたり、違う話題から自然に入浴にお誘いするよう実践している。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	本人の希望、生活習慣に合わせております。眠れない方はフロアにて、眠くなるまで一緒に過ごしています。		



自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬の情報をファイリングし、各自確認している。職員が受診対応した場合は、医師、薬剤師から副作用等の注意事項を必ず聞き、申し送るようにしている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	その人らしさが活かせるように、生活歴をアセスメントし役割につなげるようにしている。農業をされていた方は農作業、主婦をされていた方は清掃、家事等手伝って頂いている。また、個々に出来てしてみたい事を探そうにしております。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	外出レク以外に行ってみようとする所は、日程を調整し可能な限り実施している。日々の散歩、ドライブ等はこちらから声をかけるか希望があれば実施しております。	事業所の周囲や、気分の良い日は遠回りして川まで足を伸ばし、散歩を日課としている。日用品や洋服の買物など、個人対応で支援している。天気の良い日に四季折々の花見やイチゴ狩りなど、またその日の気分で遠出し、道の駅での買物の後アイスを食べたりと外出を楽しんでいる。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	金銭管理は事業所が管理しているが、個人の買い物の際は、職員が付き添いお金を渡し、買い物をしております。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	希望があれば、電話や手紙のやり取りは自由であり支援している。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	季節を感じられるような、外の景色が良く見える大窓や、菜園や花壇がある。仲が良い方同士がお喋りできる、ちょっとした空間(長椅子・ソファ)があれば良いと思うので検討している。	各所に絵画がかけられ、居室のドアに花の絵がフンポイントに施され、多機能に使用される量のコーナーが設けてある。しかし、利用者の作品や写真など日常の生活の様子に触れるもの、季節感を感じる物、気分を換える場所、馴染みの調度品など、居心地の良い共用空間作りはこれからの取り組みとなっている。	まだ、新築の匂いが残り、これから様々な工夫に希望がもてる。やはり、利用者の生活の質を高め、喜怒哀楽をみんなでも共有するような、温もりがあり、笑いの溢れる場を提供する共用空間作りへの取り組みに期待したい。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	和室があり、昼寝をされる方もいたり、物干しとして使ったり、利用者同士座って話したり出来る多目的スペースである。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	安心できるように、可能な限り、今まで暮らしてきた居住空間の継続を考え、布団等の馴染みのある物、仏壇等の生活習慣になっていた物を持ってきて頂き配置している。	各居室カーテンや全ての家具が個人の持ち込みであり、家庭と同じように、床に温かい敷物、馴染みの整理ダンスや鏡台を持ち込んだり、使い慣れた机と椅子を置き日常の習慣を継続するような、本人の生活に配慮した居室となっている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	バリアフリーな作りであっても、その人に合っている物かどうかを、常に考えるように心がけている。同じような扉のため、居室が解らなくなったり、洗面所をトイレと間違えたりする事もあるため、その都度、対応する必要がある。		